

KKJにおける学生満足度測定の試み ー合宿調査と授業調査の結果を手がかりにー

田部井潤
(浜松大学国際経済学部)

1. はじめに

京都大学と慶應義塾大学の間で行われた合同授業（以下「KKJ」）の概要については、既に他の論文で報告されている。本稿は、学生満足度という視点から、KKJにおける合宿調査並びに慶應義塾大学の授業調査の2つのデータ分析を行い、KKJが学生にとってどのように評価されているのかを検証するものである。

日本では特に1990年代から大学の授業改革が進んでいるが、授業に対する学生満足度調査もその1つである。まずここで、本稿の対象となるKKJの授業（ゼミナール）活動を振り返っておきたい。KKJは次の2点においてその特色を持つものと考えられる。第一に、大学間の継続的な合同授業であることである。確かに今日までにも、大学間で合同合宿を行ったり、ゼミナール単位で様々なコンペティションは行われている。しかしながらそれらの活動は、継続的というよりは合宿期間中だけの合同の勉強会であったり、各々のゼミナール活動の研究成果を競いあうものであった。しかしながら、KKJの活動は、少なくとも履修期間全体を通じて、2つの大学の2つの授業（ゼミナール）が相互に交流するものであった。第二には、この授業を支えたものが、インターネットであり、電子メールやホームページを土台とした活動であることである。さらに、これらオンライン・コミュニケーションのみならず、履修期間終盤にオフライン・ミーティング（合宿）が開催された点である。学生は、オンラインの過程の中で、まだ直接会ったことのない相手の大学の学生に対する期待、不安などを感じつつ、オフラインで直接的に接触することにより、それまでの自分の考えや感情を確かめたり、想像とは違った現実に直面するのである。

この実験的な合同授業に対する学生の満足度は、まず一つには合宿という非日常的なイベントという側面から評価できる。オフライン・ミーティングを行うことで、オンライン・コミュニケーションで学ぶことのできない点が補われ、それがさらにオンライン・コミュニケーションのあり方へフィードバックされる。この2つのコミュニケーション経路を通じて学べるものを学生がどのように評価するのかが、第一のポイントである。また、第二のポイントとしては、授業期間が終了した時点で学生は、この授業（ゼミナール）をどう評価したかが重要である。合宿という非日常性から離れて、日常の生活に戻って、客観的にこの授業を評価したとき、学生の目に映るものは何なのか。授業調査はまさに彼らの冷静な評価の一端を指し示すものである。

2. 合宿調査の結果

(1) 調査の概要

調査は、KKJの1つの大きなイベントである合宿期間中（平成11年6月18日～6月20日）に行われた。本調査は、まず合宿開始時点で、次の5項目について自記式の質問紙調査（以下「プレアンケート」）で行われた。

- ①KKJのホームページへのアクセス頻度（SA項目）
- ②この合宿をどの程度楽しみにしていたか（SA項目）
- ③合宿までのやりとりについて（自由記述）
- ④合宿直前の授業後、ホームページにアクセスしたか、その理由（SA項目、自由記述）
- ⑤合宿に何を期待するのか（自由記述）

さらに、合宿終了時点において再度、次の5項目について自記式の質問紙調査（以下「ポストアンケート」）が行われた。

- ①合宿に対する満足度（SA項目）
- ②満足した点、満足できなかった点（自由記述）
- ③合宿によりホームページへの参加の仕方が変わるか（SA項目）

④変わらと思う理由（自由記述）

⑤授業，ホームページ，合宿についての改善並びに要求（自由記述）

また，両調査とも，属性項目として学生の所属学部，学年，氏名の記述を求めた。なお，プレ・ポストアンケートの原票については，巻末の資料を参考にしていきたい。

（2）定量調査の分析結果

ここでの定量調査分析は，前述のSA項目について行う。アンケートに回答した学生は，プレアンケートで30名，ポストアンケートで32名であり，プレ・ポスト双方とも回答した学生は，29名であった。回答者が少ないので，分析はどちらか一方でも回答があった学生33名を対象に行う。回答者33名の属性別内訳は以下の通りである。所属大学では京都大学20名，慶應義塾大学13名，学年では2年生12名，3年生10名，4年生11名，性別では男性20名，女性13名であった。

①プレアンケート結果

まず，「あなたは，KKJのホームページにどの程度アクセスしていたか」という設問では，「週3～4回程度」という回答が最も多く13票（43.3%）を占め，以下に「週2回程度」が8票（26.7%），「週1回」が4票（13.3%）と続いた。毎日1回は必ずアクセスするものは，全体の中では3票（10.0%）と少数派であるが，全体の9割以上の学生は，最低でも週1回以上はホームページにアクセスしていたことが分かった。

次に「あなたは，この合宿をどの程度楽しみにしていましたか」という設問では，「まあまあ楽しみにしていた」という回答が最も多く16票（53.3%）であり，次に多かった「非常に楽しみにしていた」という回答11票（36.7%）と合わせると，全体の9割の学生が合宿に期待を持って参加していることが分かった。

さらに，「あなたは，合宿直前の授業（ゼミナール）の後にKKJのホームページにアクセスしましたか」という設問では，「アクセスした」学生が21票（70.0%）であり，「アクセスしなかった」学生が9票（30.0%）であった。合宿直前の授業（ゼミナール）は，慶應大学は火曜日に，京都大学は水曜日に行われており，また合宿の開始が金曜日であった。この結果からも，学生の合宿直前における期待の高さが伺える。

以上の3つの設問で，属性のよる違いがないかどうかを検証した。大学（「京都大学」，「慶應義塾大学」という2つのカテゴリー），学年（「2年生」，「3年生」，「4年生」という3つのカテゴリー），性別（「男性」，「女性」という2つのカテゴリー）という3つの属性から，クロス集計並びに χ^2 検定を行ったが，有意な差は見られなかった。

②ポストアンケート結果

まず，「あなたはこの合宿に参加して，どの程度満足しましたか」という設問では，「非情に満足だった」という回答が最も多く22票（68.8%）を占め，次に多かった「まあまあ満足だった」9票（28.1%）と合わせると実に97%弱の学生が合宿に満足感を示していた。

さらに「この合宿によって，あなたのホームページへの参加の仕方は変わりますか」という設問では，「少し変わらと思う」が15票（46.9%），「非常に変わらと思う」が13票（40.6%）と8割以上の学生は，合宿により今後ホームページへの関与の仕方が変化することを予感している。

上記2つの設問で，プレアンケート同様，属性のよる違いがないかどうかを検証した。大学，学年，性別という3つの属性から，クロス集計並びに χ^2 検定を行ったが，有意な差は見られなかった。

（3）定性調査の分析結果

以上見てきたように，属性による定量調査の回答に違いは見られなかった。そこでは，京都大学，慶應義塾大学双方の学生とも合宿は期待していたものであり，合宿により自分のあり方が変わっていく様子が見てとれる。それでは実際に彼らが合宿までにたどった経験や，合宿で学んだ具体的内容を彼らはどう評価しているのだろうか。定性調査の分析結果は，その答えの1つである。なお，定性分析における記述内容は，学生の回答を原文のまま掲載していく。また回答者の属性項目としては，大学，学年，性別を付記しておく。

①プレアンケート結果

始めに、「あなたは、合宿までのやりとり（授業やホームページ上）について、どんなことを感じていますか」という設問に対する自由記述で書かれた内容を見てみよう。

まずホームページへの書き込みに対して、漠然とした不安やとまどい、そして心配を記した回答には次のようなものがあった。

「顔がわからない不安。伝わってるの？反応くるの？」（慶大、4年、女子）

「フリーのコーナーにどのように入っていけばいいのか計りかねるときがあった。」（慶大、4年、男子）

これら感情は、まず第一にホームページ上の見知らぬ相手に対する警戒心である。

「ホームページ上では、完全に、相手がどのようなことを考えているか、どのような雰囲気なのか、何を求めているのかつかみきれない部分がありとまどいを感じた。」（慶大、3年、女子）

第二には、この不安は、いざ自分がホームページに書き込んだとき、相手はどのような反応を返してくるのか。そしてその結果として、次の記述の表されているように相手から自分がどう見られているのかという不安な気持ちにつながっている。

「相手の顔が見えず、どのような反応をされるか不安だったので、初めてアクセスする時緊張した。自分が相手に受け入れられるかどうか不安だった。」（慶大、2年、女子）

また、ホームページ上で交わされている話題を自分がどの程度理解しているかについての不安も見られた。

「様々な話題が飛びかってて、すごいと思った。この話を全て理解しておく必要があるのか、不安に思った。」（慶大、4年、女子）

これら様々な不安は、対面したことのない相手に対しては、誰もが多少少なかれ感じるものであろう。しかしこの状況を客観的に観察し、逆にそれを楽しんでいると見られる回答もあった。

「混沌。実態があまりつかめなかった。でもそれがおもしろかったと思う。」（京大、2年、男子）

「それぞれの発言が新鮮で楽しい。時に、真剣に考えた末の発言や書き込みはその人の姿勢そのものを表していておもしろい。」（京大、2年、男子）

不安だけでなく、合宿前のホームページでのやりとりに対しては、オンライン・コミュニケーションが持つ別の側面も見られた。ホームページでは、とりわけ合宿に関する話題が中心を占めていたようであるが、その手続きについても回答があった。

「webでの議論は時間がかかりすぎてまだるっこしい。」（慶大、4年、男子）

「もどかしい。会話じゃなく発言の投げあいで決まらない。声を出さない（ホームページに出ない）部分が全く伝わらない。時間がたりない。」（慶大、3年、女子）

「以前、セミナー等の企画をするサークルに入っていたので、合宿のスケジュールやセッションを組んでいくときに、けっこうもどかしさを感じた。仕方ないけど。」（京大、2年、女子）

これらの回答は、オンライン・コミュニケーションが持つ対話の非対面性や非同時性の障害についての一面を表している。

次に、「あなたは、今回の合宿に何を期待していますか」という設問に対する自由記述に書かれた内容を見てみよう。ここで見られる回答はまず、合宿において、自己の発見、自己成長を期待するものであった。

「初対面の人とどれだけうちとけられるのかのチャレンジ」（慶大、4年、男子）

「自己の（再？）発見」（京大、2年、男子）

「言葉にはしづらいが、強いて言うなら自分への良い刺激になればいいと思う。」（京大、2年、男子）

「自分の視野を広げたい。今回の参加者には自分が今まであまり接する機会のなかったような人々が多数いるはず、彼等との交流を通じて、僕の考え方に新たな一面をつけ加えてみたい。」（京大、4年、男子）

「他大学の集団との交流から自分にプラスになるものが得られれば…と思います。」（京大、3年、男子）

これらの回答とは別に、純粹に合宿を楽しみたいとする回答や相手校の学生に対する未知の期待もあった。

「ただ単純に楽しむ・友人を作る。」（慶大、3年、女子）

「京大にどんな人がいるのか知るのが楽しみ。」（慶大、4年、女子）

「めずらしいたいけんでたのしそう。」（京大、2年、男子）

また、これは、慶應義塾大学の学生の回答に多々見られるものであり、ゼミナールのテーマと関連しているものと思われるが、京都大学という異文化や彼らの授業の内容についての好奇心が述べられているものもあった。

「京大文化を知ること。京大生ってどんな人？を探りたい。授業の進め方の違い。」（慶大、4年、女子）

「広い意味での異文化を体験したい、に触れたい。」（慶大、3年、女子）

「違う文化・価値観を持つ人の考えに触れる。」（慶大、3年、女子）

②ポストアンケート結果

ポストアンケートでは、まず合宿の満足度について「あなたは、どのような点に満足したのでしょうか」という設問で自由記述を求めた。

これに対する回答では、プレアンケートでの自己の発見、自己成長の結果について述べたものがある。

「異文化の人と接触することで今まで見えなかった新しい自分を発見できたから。」（慶大、2年、女子）

「人と色々話せたこと。知識というよりも、ものの考え方、諸事物との関わり方みたいなものの幅が広がった点。」（京大、2年、男子）

「自分の世界が広がった。僕は今まで自分の世界、自分の友人とかにほんまに満足してた。そのせいですぐに世界の広がりやすなおにうけ入れる（にはかなりのエネルギーがいるし、2泊3日を拒否すればもとのいごごちのいい世界にもどれるから）ことができないでいるけど、僕にとって本当にすばらしいけいけん。ただし自分をみれたし、本当に幸せだ。」（京大、2年、男子）

また、両校がともに学ぶことでそこに初対面の人との出会いがあり、現実味を持った一体感、連帯感が形成されたことを述べた回答もあった。

「感動をわちあえたこと」（慶大、4年、女子）

「独自の魅力ある人々に出会い、一緒にいられたから。そして、ある人ある人のすごみをひしひしと感じられた点。」（京大、4年、女子）

「京大と慶應、京大の中、慶應の中に生まれた一体感」（慶大、4年、男子）

「京大側のことに傾ってしまうかも知れませんが、京大の教コミが合宿前より一体感を持てたということが一番印象的であった。」（京大、3年、女子）

さらに、これは合宿の終了時のまだ興奮が冷めない時点での調査であったため、自分の体験を客観的に十分消化しきれず、半ば興奮状態で合宿の感想を述べた回答もあった。

「あまりに自分にとって大変多くのことがおこりすぎて何に満足したのかという言葉にまだ表現したくないし（それによって本当のところが伝えきれないから）まだ表現できない。」（慶大、3年、女子）

「満足したとしか云えない。今、書いてもイミがないように思えるので、即答アンケートではあるけれど、どのような点かは書けない。」（京大、2年、女子）

「書ききれませんよ。なんかまず新しい人間関係が出来上がる場面に自分をおけたという事実。そんな中で、相手の人の感じ方や考え方に感動して影響を受けたと共に、その人たちとのかかわり方から、（その人に言っていることとか、ツッコんじゃうこととか）から、自分っていうものがまた理解できた。まだ自分の中でもまとまらない。」（京大、2年、男子）

次に、ホームページへの参加の仕方が変化することについて、その理由を「あなたは、どうして変わる（あるいは変わらない）と思うのでしょうか」という設問で尋ねた。回答は、まずプレアンケートで見られた、未知の相手に対する不安、とまどい、心配といった感情が解消・払拭されたことが述べられていた

「今回の合宿を通して京大生の人柄や背景を知ることができたので、暗黙の共通項のようなものができたと思う。」（慶大、4年、男子）

「合宿前は相手の顔が見えず、自分の意見にどのような反応を示してくるのか不安だったが、今は相手の顔を想像して書けると思うから。」（慶大、2年、女子）

「相手方を想像することが出来るようになるから。」（慶大、3年、女子）

「みんなのことをより多く知った気がするから、自分の話をきいてほしいと思うようになると思います。」（京大、4年、男子）

「相手のかんじがわかったので。」(京大、4年、男子)

「掲示板を見てくれるであろう人の顔や性格が少しでもわかってきたので、ちゅうちょすることなく書き込みをすることができそうだから。」(京大、2年、男子)

さらに、今後のオンライン・コミュニケーションのあり方に対して、積極的な姿勢が認められる回答もあった。

「やりとりしたい。関係を続けたいと思うから。」(慶大、4年、女子)

「より積極的に書き込むし、又、参加しようと思えるのは、この合宿で得たもの。そこで出会った新しい人間関係が今、そして今後の自分にとって非常に意味あるものであると強く感じるができるから。」(慶大、3年、女子)

「もっとネットを使って慶應を追求したいし、今後ともずっと続いていける2つのゼミだと良いと思う。(それを願う)」(京大、3年、女子)

「これからもこの関係を途切れさせたくないから。」(京大、2年、男子)

「SFCの中に個人的に話を続けたいと思う人ができたから。」(京大、2年、男子)

また、ポストアンケートにおける合宿で満足した点と同様に、今後のホームページへの関与の仕方について、まだ考えあぐねていると見られる回答もあった。

「正直、今後のホームページの姿、今後の自分の考え方というのが全く想像できないから。」(京大、2年、男子)

「まだ自分がどうなってんのかよくわからんし、HPもどうなるかまでわからない。でも書きこみをたとえしなくても、見かたがかわるだろうし、書きこみやすくなったとは思う。」(京大、2年、男子)

「まだ合宿が全然消化できていない。だから何がでてくるか分かりません。」(京大、2年、男子)

最後に、KKJについての彼らの意見や要求を「授業やホームページ、合宿などについて、何か改善、要求等ありましたら、お書きください」という設問で聞いてみた。

まず意見としては第一に、KKJの活動時間が足りないことについての指摘があった。

「授業にもっと時間がほしい。」(慶大、4年、男子)

「授業で、枠組みばかりに気を取られていたのが、残念。時間が少ない、通年Ⅹαでやった方がよいのでは？」(京大、3年、男子)

「授業は事務的なことを決めるのに時間を使いすぎる。」(京大、2年、男子)

「前期半期間だけではみじかすぎるってか、もったいないよ。」(京大、2年、男子)

第二に、合宿の施設や費用に対する意見があった。

「施設を変えて下さい。」(慶大、4年、女子)

「合宿→もっと安宿で広い部屋にザコ寝状態の方がいい(そっちの方が話をしやすい)」(慶大、3年、女子)

「安宿、空間が悪い。高級宿、よい空間。どちらがよいかわからない。やすいとたすかるのだが。」(京大、2年、男子)

「一つだけ考えたことに、費用の問題があります。この合宿はいったいだれが出費する事を前提に企画されたのでしょうか？」良い宿が良い議論を生む」という考え方は、ある意味では言っていますが、経済力の無い学生にこの論理をあてはめるのは、少し傲慢だと思います。」(慶大、3年、女子)

また、彼らの要求としては、今後も継続していきたいという意向や授業やホームページの運営の仕方についての提案であった。

「十分すぎるけど、一ついうならもっとホームページを盛り上げてからはいいかった。」(京大、2年、男子)

「後期もひきつづきやりたい。それを学生から提案したらよいじゃないかという意見もあった。そして自主ゼミにしたらという意見も。けれども、私たちがもしひきつづき教コミをやっていくとしたら、賛成の人は前期の教コミの流れを組んだ状態があって初めて賛成してくれるのだと思う。どうでしょうか。あと、やっぱりホームページに日時、曜日なんかを決めてチャット時間をもうけてほしい。」(京大、3年、女子)

さらに、学生たちはこのKKJの活動が実験的な試みであることを知っていたため、研究について関心を示す回答も見受けられた。

「京大とSFCの人の間で、個人的にメールをやりとりしているのが、どのくらいあるのか知りたいので、そんなことを調べてみて教えてほしい。」(京大、2年、女子)

「次年度の為に資料を残す(一次の学生の考えに縛りを加える)のか、残さない(→同じ失敗をする可能性もあえて残す)のか、決めておくべきではないでしょうか。」(京大、3年、男子)

3. 授業調査の結果

(1) 調査の概要

授業調査は、慶應義塾大学藤沢キャンパス(以下「SFC」)の2つの学部(総合政策学部、環境情報学部)で開部当初から行われているものである。SFCの授業は基本的にはセメスター制であり、学期の終了時点、最後の授業時間に、授業評価が行われている。再度述べるが、合宿のプレアンケートとポストアンケートがどちらかといえば合宿というオフライン・ミーティングに対する学生評価であるのに対して、この授業調査は、半期のゼミナール全体、すなわちSFCの学生のKKJ全体に対する評価という意味合いを持つものである。この授業評価の定型項目の分析から、KKJに対するSFCの学生の評価を検証していく。定型項目は、次のような13の設問からなり、これらに対して、「強くそう思う」から「全くそうは思わない」までの5件法で授業評価が求められた。

- ①「この授業は体系的だった。」(図表中では「体系的」)
- ②「この授業で使われたテキスト、配付資料などは有益だった。」(図表中では「テキスト」)
- ③「この授業では、黒板、OHP、ビデオ、スライドなどの使い方が効果的だった。」(図表中では「黒板」)
- ④「抽象的な観念・理論をよく判るように説明された。」(図表中では「抽象的」)
- ⑤「話し方が聞き取りやすかった。」(図表中では「話し方」)
- ⑥「授業は興味のあるものだった。」(図表中では「興味」)
- ⑦「この授業は自分にとって価値があった。」(図表中では「価値」)
- ⑧「授業担当者は学生の参加を促し、学生に十分応答した。」(図表中では「参加」)
- ⑨「授業担当者は、学生に適切に助言を与え相談にのってくれた。」(図表中では「助言」)
- ⑩「授業担当者は授業の際、クラスをうまくまとめた。」(図表中では「クラス」)
- ⑪「私はこの授業によく出席した。」(図表中では「出席」)
- ⑫「私はこの授業に意欲的に取り組んだ。」(図表中では「意欲的」)
- ⑬「私はこの授業を他の学生に薦めたい。」(図表中では「薦める」)

なお回答者の属性に関しては、学部、性別、学年の記入が求められている。また、裏面には定性項目の設問が設けられている。

(2) 定量・定性調査の分析結果

① 定量調査の結果

授業調査に回答をよせた学生の属性別内訳は以下の通りである。まず学部別で見ると、総合政策学部15名、環境情報学部9名、また性別で見ると、男子学生8名、女子学生16名、さらに学年別で見ると、2年生3名、3年生11名、4年生10名であった。

まず、上記13の設問に対する学生の授業評価を、「強くそう思う」=5、「そう思う」=4、「どちらともいえない」=3、「そう思わない」=2、「全くそうは思わない」=1にコード化して、平均値を算出した。最も評価が高かった設問は、「私はこの授業によく出席した。」であり、平均値が4.87、反対に最も評価の低かった設問は、「この授業は体系的だった。」であり、評価の平均値は3.50であった。

この授業評価において、学部、性別、学年の違いにより平均値に差が見られないかをt検定並びに分散分析によって検定した。その結果有意な差が見られたものは、学部間で「授業は興味のあるものだった。」(総合政策学部=4.73、環境情報学部=4.00、 $p < 0.03$)と「この授業は自分にとって価値があった。」(総合政策学部=4.27、環境情報学部=3.33、 $p < 0.01$)の2つの設問だけであった。

② 定性調査の結果

上述したように、授業評価では、調査票の裏面に定性項目の設問が設けられている。定性調査は、「この科目で

よかったこと」,「この科目で改善を要すること」「一般的な批評,意見,提案」の3つ設問から構成されている。ここでは,回答が必ずしもKKJの活動に直接関連するものだけではないと思われ,かつ回答数も少なく,回答者のすべてが合宿に参加しているわけではないので,分析は控えてすべての回答を原文のまま列挙していく。なお,回答者の属性については,学部,学年,性別間で定量分析においてほとんど差が見られないことから省略する。

「この科目でよかったこと」についての自由記述

「嬉しい思いをした。」「普通ならできなかったプロジェクトをやれた。」「京大文化にふれ,色々と感じた。自由の中で何をするかを考えた。」「話し合いを通して,いろいろなものの見方を知り,視野を広げることに役立った。異文化交流を体験できた。」「京大という全く新しい集団に出会えたことで,研究会やSFCを新たな視点で見られるようになったところ。」「本音で話すこと。初対面の人を通じて自分を見つめること。良き友達を作ること全てができた。」「KKJの反省会で先生は,SFCサイドの学部外生の人にお礼をいいたい,とおっしゃっていましたが,私はそのことに気が付かず,あまり何も考えていなかった。私自身,すごく感動した体験ができたが,それも多くのOB,OGのおかげだということに気が付き,またそのようなOB,OGを持ったこと自体とても幸せなことだと思った。」「うまく言えないが得るものがとても大きかったこと。」「新しい出会いと発見」「京大のいろいろな人と知り合えたこと。自分の視野の狭さに気がついたこと。」「自分の常識を崩してくれた。それが考えるきっかけになった。」「マネジメントに関わることで,参加者としてだけではなくもう少し客観的に,メタ的に視点を持つことができた。」「いろいろな人に知り合えた。」「学生の自主性にゆだねられていたこと。自分で多くのものを投入すれば,多くのものを得る可能性があること。」「知識を理論でつめ込むのではなく,経験として学べること。」「何がよかったというより,長期スパンでながめた時,確実に自分が成長したことが感じられたこと。」「様々な考えにふれることができた。ものごとに意味を与えることができるようになった。」「みんなの話を通じて,今まで知らなかった学問分野の存在に気が付き,それについて考えることができた。自分の興味分野についても改めて考える機会を持てた。」「論理的思考や表現,受信,発見といった「人間力」を鍛えられたこと。」「3年生の時は,果たして自分は4年生らしい4年生になれるかどうか,不安に思っていた。しかし,実際に4年生になってみると,知らず知らずに自分の中に4年生としての視点が芽生えていた。先輩として教えるのではなく,先輩だからこそ学べるが多かった。」「ディスカッション。お茶とおやつ。欠席者へのフォロー。」「話し合いの場があったこと。」「研究会のあり方について最後に話し合えたこと。」

「この科目で改善を要すること」についての自由記述

「合宿のスタンスが慶應と京都で違うことに問題があると思う。慶應にとっては,多々ある授業の1つで,初めは自由参加といわれていた。京都にとっては合宿は大目標で,やる気のある選抜メンバーが集まっていた。同じ位のやる気と思い入れのある人を集めた方が,より良いものが作れたと思う。」「事前の話し合いがあまりできなかったししまうのです。私としては指針を時には欲しいと思います。」

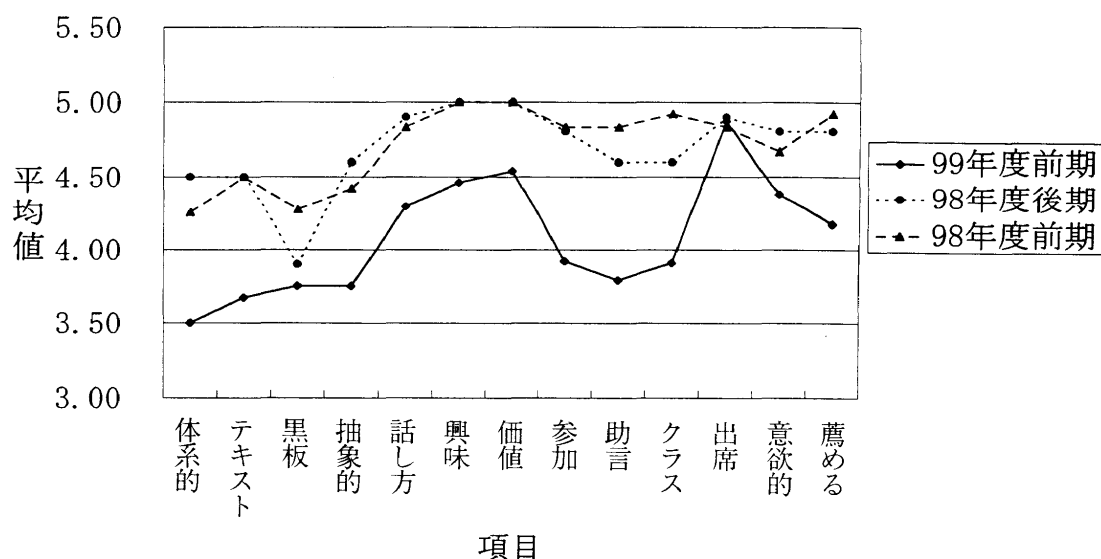
「一般的な批評,意見,提案」についての自由記述

「最高にすばらしい体験をすることかできました。」「私自身,この研究会は先生の方針(考え方)に興味を持って入ったので,今の3年生が持っている疑問は持っていない。」「ただ良かったと書くことが軽薄に感じられるような,実のあるものだった。」「井下研は,もっと大きな位置付けとして参加したら,もっと得るものも感動も大きかったと思う。」「良くしようとすれば,きっと良くなるものだと思う。」「気付きを待つことを徹底した結果,きっかけを与えることまで自制してしまっている感があります。それは先生,および一部の学生に,です。」「シラバスの内容とは確かにちがうゼミだと思う。でも,井下研のことを真剣に考える同じ思いを共有できる人が,集まる魅力がこのゼミにはあると思う。」

(3) 過去の授業調査結果との比較

ここでは,前述のKKJを中心としたゼミナールの授業評価をそれ以前(98年度前期,98年度後期)のゼミナールの授業評価結果と比較する。学生のメンバー構成には変化があるが,担当者は変わっていない。

98年度春学期,98年度秋学期,そしてすでに見てきた99年度春学期の授業評価の結果(平均値)を比較したものが図1である。この図を見ると,99年度春学期の授業評価のスコアが前年のそれと比べて低いことが分かる。



〈図1：授業調査結果（平均値の比較）〉

この結果を確かめるために、98年度春学期と98年度秋学期のデータを合算して98年度のデータとし、98年度と99年度の結果に平均値の差があるかをt検定を用いて検定した。検定した結果は表1の通り、13項目中10項目で有意な差が見られ、その項目すべてにおいて、99年度の授業評価の平均値が98年度のそれを下回った。

表1 年度別定型項目の比較

項目	平均値		検定結果
	99年度	98年度	
体系的	3.50	4.36	**
テキスト	3.67	4.50	**
黒板	3.75	4.10	
抽象的	3.75	4.50	**
話し方	4.29	4.86	**
興味	4.46	5.00	**
価値	4.54	5.00	**
参加	3.92	4.82	**
助言	3.79	4.72	**
クラス	3.91	4.77	**
出席	4.87	4.86	
意欲的	4.38	4.73	
薦める	4.17	4.86	**

**： $p < 0.01$ で有意

4. まとめ

(1) 考察

以上、KKJにおける合宿の評価とSFCの授業評価を見てきたわけであるが、その結果を概観すると次のようにいえよう。

まず第一に、合宿に関しては、定量、定性調査の結果を見る限り、学生からかなり高い評価を受けていることが分かる。プレアンケートにおいて明らかになった学生の不安や合宿に対する期待が、ポストアンケートでは解消されていた。合宿、すなわちオフライン・ミーティングでの経験は、まさに彼ら学生が期待した通りもしくはそれ以上のものであり、相手校の学生との相互理解をうまく果たし得たと言える。

しかしながら、SFCで行われた授業評価では、学生のKKJを含んだゼミナール活動に対する満足度は昨年の授業評価と比較して、かなり低い評価となった。担当者の変更もなく、また回答者の属性の異なる違いも見られないことから、この結果は単に本年度この科目を履修した学生の評価が偏ったものでなく、履修した学生全体がそのような評価をしたことが分かる。

それでは、その原因とは何なのであろうか。ここでは、KKJが今後も継続する予定である実験的な試みであることも考慮して、仮説立脚的な解釈をしていきたいと思う。現時点の解釈は、次の3点にまとめられる。

まず、第一に履修した学生数の問題である。例年の履修者数は授業評価の票数から見る限り、10名程度であったが、99年度の春学期のそれは倍以上の24名であった（研究会については研究会（1）、（2）が開講されており、実際には2コマの授業で合計24名と解釈される）。例年以上の履修者が参加したため、ゼミナールにおける教員の学生に対する関与が半減したことがその原因ではないであろうか。なお、ここで、京大側の授業は複数の教員団により運営していたが、慶應側のゼミナールは一人の教員によるものであったことを指摘しておきたい。

ところで、この人数の問題は、今後のKKJ活動にとっては大きな要因と思われる。まず、KKJでは両校の授業形態が違う（「京大が授業で慶大がゼミナール」）。また、授業の内容の違いが、両校の学生の合宿の捉え方にズレを生じさせている。このことは「合宿のスタンスが慶應と京都で違うことに問題があると思う。慶應にとっては、多々ある授業の1つで、初めは自由参加といわれていた。京都にとっては合宿は大目標で、やる気のある選抜メンバーが集まっていた。」という学生の自由記述が、証明している。今後、両校での合同授業が現在の形態を継承していき、授業の内容や進め方もしくは履修者の調整に配慮しないまま、履修者人数にアンバランスが生じるとしたら、このことは学生間のコミュニケーション活動には大きな影響を及ぼすだろう。すなわちそれは、ホームページへの関与や電子メールの利用、合宿への参加という目に見える側面ばかりでなく、合宿や授業の満足度の差となって現れることが予想される。

第二には、シラバスと実際のゼミナール活動との関係である。シラバスとは、教員と学生の間の授業に関する契約書的な役割を果たしている。しかし定性結果で見たように、学生の「この科目で改善を要すること」についての自由記述の中で、「シラバスに誤解が生じ易い点」や「シラバスが説明不足」が指摘されている。このシラバスと実際の授業についての学生と教員の間の認識の違いが、授業評価に影響したものと推測できる。とくに合宿の参加形態（自由参加か半強制的参加か）に対する不満などはその一端と考えられる。

第三には、このゼミナールにおける教師の教授方法にその原因を求めると考える。ゼミナールでの教授方法は、「教える」という従来の授業形態から教師が一步退き、学生が「自ら学ぶ」、「気づく」という形態で進められている。それは前述の定性結果に見られる「**気付きを待つことを徹底した結果、きっかけを与えることまで自制してしまっている感があります。それは先生、および一部の学生に、です。**」という自由記述に現れている。この点についての教師と学生の間の合意が、必ずしも形成されていなかったことが原因と考えられる。これは、見方を変えれば従来の知識教授型の教授法から体験重視型の教授法への変化に伴う問題である。この点に関しては、事前にシラバスや教員と学生との話し合いの中で、学生側の理解を確認しておくことが要求される。また、現在の授業調査の設問自体が、体験重視型の教授法の評価に適したものかについても検討しなければならない。

（2）今後の課題

最後に今後のKKJにおける研究の課題として、次の2点を指摘しておきたい。

まず第一に、両校の授業（ゼミナール）において適切な共通した設問による授業調査を、授業の開始前・開始後に実施することである。これは合宿調査についてもあてはまる。確かに、合宿調査ではプレ・ポストアンケートという両面から調査が実行されたが、定量結果が偏ってしまい、その点では必ずしも信頼性の高い調査とは言えない。授業評価とは一面では、授業前の学生の授業に対する期待が、授業終了時点で充足されたかについての判断基準である。またシラバスとはあくまでも教員側が振り出す一方的な契約書である。シラバスと授業評価をこのように定義するならば、授業に対する学生一人一人の要求は違うため、教員はおそらくより多くの学生が満足できるような授業運営をしていくはずである。とりわけ、体験重視型の授業では、知識教授型よりもその傾向が強いと思われる。プレアンケートを実施することで、教員は学生一人一人の授業に対する要求を正確に把握できるばかりでなく、授業前の期待と授業後の結果の比較（授業評価）はより容易になると思われる。

第二には、KKJ自体が持つ問題点である。今回のこの授業に関しては、教員、学生も含めてかなりの労力がかかっている。とりわけ初年度の試みということもあり、これに費やしたエネルギーの大きさは計り知れない。この状況の中で合宿調査で見たように、学生満足度がかなり高いスコアを示すことは当然とも言えよう。しかしながら、この結果を他の授業に応用しようと考えたとき、当然そこには大きな障害が予想される。学生満足度の側面から見るならば、何が学生を満足させ、何が学生の不満を招いたかについてより深い調査と考察が必要とされる。それを

念頭に置いて，授業の運営方法や授業評価（学生満足度）の測定を今後計画的に進めていかなければなるまい。